

目次

密室殺人

5

訳者あとがき

353

解説 林 克郎

355

主要登場人物

- ダグラス・マートン……………語り手。探偵事務所に勤務する青年
トマス・バット……………ダグラスのおじ。探偵事務所長
- ハリエット・ステイル……………〈樫の木荘〉に住む未亡人
ジョージ・ライス……………ハリエットの兄
メアリー・グレン……………ハリエットの亡夫の母
オリヴ・ステイル……………メアリーの娘。三姉妹の一番上
キャロライン・ホワイトヘッド……………メアリーの娘。三姉妹の真ん中
ヴァイオレット・ステイル……………メアリーの娘。三姉妹の一番下
リンダ・ホワイトヘッド……………キャロラインの娘
ヘンリー・ホワイトヘッド……………キャロラインの息子
ベッシー・ホランド……………〈樫の木荘〉のメイド
ミセス・ピビット……………〈樫の木荘〉の料理人
ウィリアム・ブリッグズ……………ヴァイオレットの婚約者
- エドワード・ビール……………スコットランド・ヤードの主任警部
アントニー・パードン……………『ストックプロカー』副編集長

密室殺人

第一部
前々日

第一章

ぼくのおじは狡猾な老人だ。仕事の依頼人にいつも話を繰り返させるのだが、この用心深さのおかげで重要な点が明らかになり、たいいていの場合、それがなければ全然うまくいかなかったはずだ。依頼人の抱えているトラブルは、まずおじ本人に対して説明され、次におじがそのトラブルを改善する代行者として選んだ人物に対して説明される。その後、二人で相談し、お互いの情報を吟味して、食い違いや見落としや明白な嘘がないか確かめるといわけだ。

おじが、調査局の長を務めていることは、説明しておいたほうがいいだろう。つまり——調査局という呼び名はおじ自身が命名した——私立探偵事務所を取り仕切っているということだ。変わった名前と呼んでいる理由をぼくが尋ねたとき、おじはかぎ鼻の鼻先から見下すような目でぼくを眺めて、ひどく無愛想な態度をとった。

「どんなばかでも調査はできるだろう、ダグラス」とおじは言った。「だが、おまえの一番の親友だつて、おまえのことを探偵と呼んでくれるか？ そうは思えん——ちよつと思えんな」

さて、認めるのは嫌なのだが、おじの言う通りだと思う。以前のぼくは違う意見を持っていたのだけれども、それは経験よりも希望によってはぐくまれた意見で、これから説明する出来事が起こったあとは、調査員という言葉でぼくの能力はだいたい要約されると思つている。語り手としてうま

くやれるかどうかは、この先を読んでものお楽しみだ。

おじの名前はトマス・バットといい、ぼくはその甥のダグラス・マートンだ。ぼくの母はおじの五人いる姉妹の一番上で、最初に亡くなった。おじはチャンセリー・レインに事務所を構えていて、常勤の従業員が十一人いる。ぼくはオクスフォードを卒業してからここで働き始めて六年経つが、給料がいまの二倍になろうとも、ほかの仕事に就こうとは思わない。とは言ってもそれは、おじのくれる金額の半分以上の給料を出そうと言ってくれる人が、いまのところ誰もいないからかもしれない。

私立探偵に関する一般的な印象は、滑稽で、実在の人物というよりも道化芝居の登場人物、がっちりと変装して、不倫夫をその現場の寝室の扉までとことん追跡する人たちというようなものだと思う。このイメージはまったくの偽りではないかもしれないが、そこに含まれていない内容が多すぎる。ぼく自身は、つけ眉毛すら付けたこともないし、たとえ不倫夫を追跡したことがあるとしても、無意識にあとを追っていただけだろう。おじは極力、離婚には手を出さない。おじが言うには、離婚に関する法律はとんでもなくひねくれていて愚かしく、その偽善的な自己満足には、かかわらなければかわらないほど好ましいらしい。

だが、おじの話はここでやめなくては。これから語る話の主人公は、ミセス・ハリエット・ステイールなのだから。意地悪く生きて、悔い改めることなく死んだご婦人だ。たとえ長所があったとしても、守銭奴が金を隠すように注意深く隠しているように見えた。もしかすると本人は、家具の多すぎる寝室に一人でいるとき、ジグソーパズルを近視眼的についたり、高価な時計のぜんまいを巻いたりしながら、自分の長所に感心していたのかもしれないが、それはもう誰にもわからない。兄のジョージ・ライスなら、彼女に有利なことをなにか知っているかもしれない。子供のころの親切なおこな

いとか。たとえ、余ったお菓子を人にあげたとか、かわいがっていたベットが死んだときに哀れみの言葉をかけたという程度でも。だが、ジョージ・ライスはそういう個人的な話を尋ねることのできる相手ではない。ウイスキーが値上がりしたので無理だ。すべてを考慮に入れても、彼女について好意的な言葉を口にはしているのは、いまではほくのおじだけだと思う。ごくたまに、感傷的な気分になったときに限られるが。彼女が殺される前の数週間の間、同じ屋敷でいつも眠っていた九名の人々にとって嫌悪の対象だったことは疑う余地がないはずで、場合によっては、軽蔑、積極的な悪意、消えることのない激しい憎悪の対象となっていたのだ。

彼女がチャンセリー・レインにあるうちの事務所に初めてやって来たのは、去る八月八日木曜日のことだった。この日付は、話のついでに触れておく価値がある。それはつまり、その日にはまだかろうじて平和な世界にほくらは生きていたという意味だからだ。ダンツイヒはまだポーランドの領土で、ポーランドはまだ自治権を有していて、鎌と鉤十字の血塗られた共有地にはなっていないかった。それ以降に起こったことと、いまなお起きていることについては、ここでは語らない。あまりにも周知のことだし、ほくら全員があまりにも痛烈に経験していることだから。これは昔の話、ヨロ口ッパがひび割れて燃え上がり煙と化する前の話なのだ。

もしその世界、つまり暦の上ではほんの数カ月前の世界が、ハンサム・キャブ(二十世紀初頭までよく使われた二人乗り一頭立ての馬車)やマスターシユ・カップ(口髭を濡らさないように内側にカバーがついたカップ)の時代のように非現実的で漠然として遠い昔のことのように思えるとしたら、残念な話だ。だが事實は、どれだけみすばらしくとも提示しなくてはならない。生前のミセス・ハリエット・ステイルは、なによりもまずは生身の人間、つまり食べて寝て起きることを頑固に続ける生き物で、髪を染め、仲間を困らせ、想像を絶する裸体の体重は十三ス

トーン七ポンドもあつた。一九三九年八月当時のほくの目に映つていた姿そのままにあの婦人を描き出すのは、すこぶる難しい。彼女の命を九月まで引き延ばして、その太りすぎた体を矛盾に満ちた幽霊に変える危険を冒すことなど、とうていできない。

おじの執務室へ向かう彼女が通りかかったとき、ほくのいる部屋の扉がたまたま開いていて、本当にその姿を見かけたのか、それともひよっとすると寝ぼけていただけなのかと思つたことを覚えている。暖かい日で、暑いくらいだった。たとえやせた女でも毛皮のコートを着るはずがなく、まして階段を上りきる前に息を切らしてしまうような太つた女なら、さらにあり得ない。事務所の古参の秘書ミス・プリンスのほうをためらいがちにちらっと見たほくは、自分が眠つていたわけではないとすぐわかつた。ミス・プリンスがほくと同じくらいびっくりしたのは明白で、訪問者の足音が聞こえなくなつたとき、彼女にしては珍しく笑みを浮かべた。けれども、口に出してはなにも言わず、ほくのほうも質問したくなるほど興味を惹かれたわけではなかつた。その代わりにほくはやりかけの仕事に戻つた。ところが半時間後、ほくはおじに呼ばれ、ミセス・ハリエツト・ステイルに紹介された。彼女は背が低く、身長は検死報告書によると裸足の状態で五フィート二インチで、体重はすでに述べたように十三ストーン以上——情報源は同じ——あつたが、生前はそれほど不恰好には見えなかつた。肥満体ではあるけれど、はつきりと膨れているわけではない。ブロンドの髪は明らかに染めた色で、青い帽子の下から恥ずかしげにのぞいている。ボタンを外したビーバーのコートの下には白いドレスを着ており、タックやプリーツが伸びきつた豊かな胸元が目を惹く。瞳の色は緑、いささか奥目で、不愉快なほど厳しい目つきをしている。まるで相手の正直さを値踏みしているかのような視線だが、近眼のせいかもしれない。唇は顔をできるだけほっそり見せるように描かれ、マニキュアと揃い

の鮮やかな色の口紅が塗られている。手はべたつき、全身からライラックの香りをぶんぶん漂わせている。どうしておじがぼくを彼女と知り合いにさせたがるのか、想像もつかなかった。

「甥のダグラス・マートンです」低い声でそうつぶやいたおじは、いつも以上に慈悲深いオウムのように見えた。

「お目にかかれて嬉しいわ、本当に」とご婦人が言った。それは朗々たるコントラルトの声で、ロンドンなまりが土台となっていた。

「この甥が、今日の午後三時に喜んでお宅にうかがわせていただきます」とおじが話を続け、その間ぼくは空虚な笑顔を浮かべながら、彼女のつけている指輪は少なくとも合計数百ポンドの価値はあるに違いないと考えていた。

「三時」ご婦人は時刻を復唱した。「結構だわ。たぶん都合がつけられるでしょう」

「なぜあんな気取った言い方を？」彼女がさっさと帰ったあとで、ぼくはおじにこう尋ねた。「それに、あんな人に会いに行くなんて、喜ばしくもなんともないのに」

「遊びで出かけるわけじゃない」とぼくはたしなめられた。「仕事なんだぞ」

それからおじはいきなりため息をつくとき、ペーパーナイフをいじり、煙草入れを取り出して、ぼくをじっとにらみつけた。

「夢が悪夢に変わったら」とおじは切り出した。「目を覚ますときが来たということだ。だが、もしそれまでずっと目が覚めていたなら、いったいどうすればいいんだね？　それが悪夢であることは、少なくとも可能性としては知っていたけれども、忌々しいプライドが邪魔をして認められなかったとしたら？」

幸い、ほくは返事を思いつくことができた。おじがなにがしかのショックを受けているのは明らかで、それ自体、深刻に受け止めるに値するほど珍しいことだった。

「今日がおじさんの誕生日だというふりをしましょうよ。次の月曜じゃなくて」とほくは助言した。「だからそこに座って待っててください。プレゼントを持ってきますよ」

それはブランデーのナポレオンの瓶で、ほくの名付け親が遺してくれた品だった。なるほど名付け親はよかれと思って遺してくれたのだろうが、ほくの舌はまったくお粗末で、ワインと蒸留酒の違いはわかるものの、せいぜいその程度だ。けれども、おじは喜んだ。とても喜んでくれた。旨そうにちびちび飲んだあとは、いつものおじらしくなってきた、謎めいた発言の説明することに嫌々ながらも同意した。

「わたしの雑多な過去の話でおまえを煩わせたことは、いままでなかったな」とおじは切り出した。「そして、ここの酒のせいだろうと、真つ当なルールを破るつもりはない。さしあたり、一九二〇年当時のわたしがほぼ文無しで、人生に相当うんざりしていたと言えば事足りるだろう。軍の恩給はもう消え失せていた。資産もなく、とくに資格もない四十五歳の元将校なんて、ピーナツと同じくらい取るに足らない存在で、親族にぺこぺこ頭を下げて金がないと泣きつくぐらいなら死んだほうがましだった。とはいっても、そんなことをするなら飢え死にしたはずだと言ってるわけじゃなくて、本当に困ったことにならない限り死なないわけだが、まずはやれるところまでやる覚悟はできていた。それゆえに、掛け合い漫才コンビ、ピリングズ&バットが一時的に存在したというわけだ」

おじはほくが目を丸くするのを見て、椅子に深く腰かけた。

「おまえはそういうたぐいのことは知らないだろう。そういうことの内情は」おじは話を続けながら、

鼻をさすり、かすかに微笑んだ。「おまえはずっと、扉の内側で守られてきた——おまえの母さんにきちんと守られてきたからな。生活は楽じゃなかった。とりわけ、わたしたちがたぶん、史上最悪の漫才コンビだったことを考えれば。わたしたちのコントで一番面白いところは、わたしの名前が職業にぴったり当てはまることで（バットマンには「嘲笑」の意味がある）、そんなネタでは観客がたいして笑うはずもないだろう。それでも、バラエティーショーの巡業に契約してもらうことができた——地方の劇場に一週間滞在して、立ち去ったあとには空っぽのスーツケースとかんかんに怒った宿屋の女将が取り残されるようなたぐいのものだ。プログラムのうちのわたしたちの出番はいつも幕間のあと一番最初で、人々がまだバーで酔っ払っているか、ほかの人の膝につまづいている時間なので、神経質な赤ん坊だって目を覚まさない程度の笑い声しか上がらない。それでも、さっき言ったようにわたしたちのコンビは存在していて、お払い箱にはならなかったのだから、我慢ならないほどではなかったんだろう。

まあ、やがて一行はイーストボーンに到着して、そこからが本題だ。わたしたちよりもましな芸人の一人がそこに着く前に身投げしてしまい、その理由は思い出せないが、とにかくボスは必死でありここに電話したり電報を打ったりして、幹旋所から代役をよこさせる手配をしていた。代役と言っても一人じゃない——二人組だったんだ。もちろんそのために、新しいポスターを急いで作らねばならなかったし、このよそ者たちの出番や出演時間についていろいろ陰口が飛び交ったわけだが、ボスのリーヴィは口論もいとわなかった。腹を立てているときでない限り、本当の意味で幸せになれない男だったんだ。

その二人組は曲芸ダンサーだった。プログラムには「フかっ飛びローラースケーター、ジャック&ジル」と書いてあって、ほかの出し物がみんな安っぽく見えるほど素晴らしかった。それは、スケー

トがうまかつたせいだけじゃなくて、わたしたちと比べると、この二人はまるで、納屋の庭に迷い込んだひとつがいの孔雀のように見えたからだ。二人は若く、わたしたちの大半はそうじゃなかったし、彼らの衣装のほうが立派で、着こなした方もしゃれていて、とくに女のほうは何度も振り返って見たくなるような娘だった。いまじゃ絹のストッキングの広告でしかお目にかかれなような美脚の持ち主で、しかも、ストッキングに隠されていた部分まで脚を見せてくれた。たっぷりとね。

彼らの出し物の一つは当然ながら、手桶で水をくみに行く話だ（「ジャックとジル」という題名の英語の伝承童話があり、男の子と女の子が水をくみに行くために丘に登る内容）。ジャックはイートン・スーツ（イートン校の制服に似せたスーツで、良家の子弟の定番スタイル）を着込み、ジルは蝶結びのリボンやら

サツシユベルトやらの付いたピンク色のモスリンの服でめかし込んでいた。丘は少々しょぼくて、まあ小さな舞台の上だから仕方がないんだが、別のやり方でそれを埋め合わせていた。まず、二人は苦勞してどうにかその丘に登る——突いたり押ししたりの繰り返しで、いくぶん卑猥な感じだ。次に、架空の井戸にロープを下ろして、手桶を引き上げ、その後フットライト（舞台の前端に設置してあるライト）のほうへ向かって下り始める。ジャックはとてもゆつくりと優雅に、ジルはそのあとにびったりとついて。すると、歌詞の通りに、ジャックが転ぶ。本当に転倒して、ドラムの効果音で強調し、本物の水もこぼれる。水は舞台の袖のどこかに流れ込んでいた——オーケストラ席を水浸しにしていなければ。そして締めくくりも歌詞通りに、ジルも続いて転ぶわけで、つるつる滑りながら、バランスをとろうと精いっぱい努力するんだが、やがてバランスを崩すのはみんな承知している。しかも、実に巧みなんだ。ローラースケートがとてつもなくうまくなければ、そんなことはできない——下手だったら、体が真っ二つに裂けるか、首の骨が折れてしまう。だが、遅かれ早かれ横滑りして足が宙に浮き、スケートのローラーが猛烈に回転して、そして彼女はジャックの上に落ちる。みんなびっくりして、なにも知らず

に心を痛めたもんだ。彼女は脚をバタバタさせて、下着がまる見えだった」

おじはそこで少し間を置き、どうやら思い出に耽っているようだった。親指の爪を、まるでその爪がなにかを映し出す鏡であるかのようにじっと見つめたのち、ほどなくして話を続けた。

「それに、落ちたやつはほかにもいたんだ。恋に落ちたやつが」と、おじはいくぶん恥ずかしげに言った。「もちろん、四十過ぎの男ならもつと分別があるべきなんだが、この男はだめだった。考えてみれば、まったくもってばかげてる。顔が可愛くてスタイルが良くて、向こうずねがすらつとしているといっただけの小娘にのほせ上がってしまうとは。ふん！」

とにかく、たぶん二週間くらいしつこく言い寄ったと思うんだが、うまくいかなかった。彼女は最初からわたしを見定めていて、礼儀正しく振る舞いながらも、期待を持たせるようなことはこれっぽっちもしなかった。実を言うと、日中はあまり会えなかった。練習やリハーサルの時間以外の彼女は、ベッドに寝そべって雑誌を読んでいるか、ジャックとデートだった——あいつもわたしと同じくらい彼女に惚れていて、しかもわたしより金を持っていた。本名は忘れた——カニングだかカーソンだか、そんなような名前だ。悪いやつじゃなかったんだが、顔が良くてスケートがうまい以外は、ほとんど語るところのない男だった。

その後ももちろん、わたしの運命が一夜にして一変した。おまえの大おばさんのイーディスが卒中を起こし、いまだによくわからない理由で遺言書を書き換えてからわずか二十四時間後に死んだというわけだ。わたしはもう、数え切れないほどの安宿や、毎週日曜の列車の移動や、のべつ幕なしに他人を笑わせる努力と向き合う必要がなくなった。金を相続して——自分の身に降りかかることに口を出す権利ができたのさ。

〔著者〕

ルーパート・ベニー

1909年、英国コーンウォール生まれ。本名アーネスト・バジル・チャールズ・ソーネット、別名にマーティン・タナー。1936年にThe Talkative Policemanで作家デビュー。第二次世界大戦中はロンドンの英国政府暗号学校に勤務、戦後はその後身である政府通信本部で働き、68年に退職した。1970年死去。

〔訳者〕

熊井ひろ美（くまい・ひろみ）

東京外国語大学英米語学科卒。英米文学翻訳家。主な訳書にニック・トーシュ『ダンテの遺稿』（早川書房）、キャメロン・マケイブ『編集室の床に落ちた顔』（国書刊行会）、ルーファス・キング『緯度殺人事件』（論創社）など。

みっしつきつじん

密室殺人

——論創海外ミステリ 236

2019年6月20日 初版第1刷印刷

2019年6月30日 初版第1刷発行

著者 ルーパート・ベニー

訳者 熊井ひろ美

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1768-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします